



富 楼 那 の こ こ ろ

常務取締役研究本部長 迫 村 寿 男

かなり以前の話ですが、晩秋の奈良を訪ねた事があります。興福寺に参りまして寺宝の仏像を博物館で拝観致しました。その中に富楼那の弁で有名な富楼那尊者の像も、仏陀の十大弟子の一人として入って居りました。

これが富楼那尊者の像か。その時私は正直なところ、予想外のものを見た思いがしました。雄弁家で大いなる情熱をもって仏の教えを説き、弁舌第一と称せられた富楼那。その人はさぞかし自信満々で、いかなる人をも説得せねばやまぬという日蓮聖人の様な人であろう、と想像していた私にとって、それは実に意外でした。古代の仏師は富楼那をその様な人としては表現しなかったのです。その顔にはこの世の悲しみを一人で背負ったかの如く、深い悲哀が湛えられて、見る人に強い感動を与えております。これ程の悲しい顔を私は今まで見たことはありません。

まことに人に語るということ程、せつないことはありません。どうしてこうも言葉というものは、不完全なものかと思えます。人に語って人にとどかないのは、こちらが相手の立場に立って話していないからであり、相手がこちらの立場に立って聞いていないことによるものと思えます。

研究開発も、人のために人と共に行う仕事である以上、人と話合うことの重要さは他の仕事と同様です。他の人の立場にも立ち、時間的にも空間的にもより広くより遠くを見て、私共の仕事を進めて行きたいと念じている次第です。